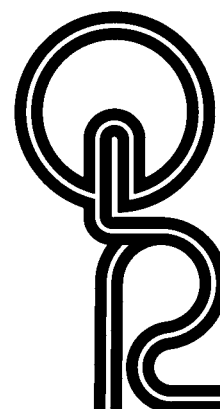


QR Newsletter



第四紀通信

Vol. 29 No.4, 2022



北海道檜山地区の日本海沿岸における礫質イベント堆積物（卜部厚志）

Vol. 29 No. 4

August 1, 2022

総会・評議員会のお知らせ..... 2	紙碑..... 16
2022年大会案内（第5報）..... 2	評議員会議事録..... 17
学会賞等受賞者選考報告..... 7	執行部会議事録..... 18
INQUA案内..... 14	会員消息..... 19
2021年学会賞・学術賞受賞記念 第2回講演会報告..... 14	

◆日本第四紀学会 2022 年度総会・第 1 回評議員会のお知らせと委任状提出のお願い

日本第四紀学会 2022 年大会期間中の 8 月 27 日(土) 15:30～16:45 に、日本第四紀学会 2022 年総会を大会会場である静岡県地震防災センターでの対面と Zoom を用いたオンラインによるハイブリッド形式で開催する予定です。会員の皆様には、ご参加をお願いします。大会への参加登録がまだの方は、大会専用サイト (<https://sites.google.com/view/2022jaqua/>) から申し込んでください。また、総会に参加されない正会員のかたは、大会専用サイトから委任状の提出をお願いします。委任する場合は、総会議長または総会に出席される正会員へ委任してください。なお、総会議長への委任を除き、個人の正会員へ委任される場合には、出席される正会員 1 名につき、欠席される正会員 1 名分しか委任を受けることができませんので、事前に委任者にご確認ください。参加登録及び委任状提出の締め切りは 8 月 19 日(金)17 時です。

総会に引き続いて、2022 年の学会賞、論文賞、功労賞などの受賞者の方および名誉会員に選出された方の表彰式を行いますので、こちらへもご参加をお願いします。

総会資料は、8 月 24 日ころまでに、会員マイページ (<https://mypage.sasj2.net/site/jaqua>) 内に掲載する予定です。会員マイページへは、会員番号(会誌が入った封筒の会員宛名の下にある 10 桁の数字)とパスワードを入力してログインしてください。総会資料は会場では基本的には配布しませんので、各自パソコンにダウンロードされるか、印刷してご用意ください。

2022 年度第 1 回評議員会は、大会前の 8 月 25 日(木) 14:00～17:00 に Zoom を用いたオンラインで開催します。評議員会メンバーには後日メーリングリストにて詳細を連絡いたします。なお、会長経験者・名誉会員の方には、今回は個別の案内を差し上げませんので、評議員会に参加される方は、8 月 19 日(金)までに下記庶務委員会まで電子メールにて参加のご連絡をお願いします。

庶務委員会メールアドレス：shomu(at)quaternary.jp [(at)の部分を @ に変えて送ってください]

◆日本第四紀学会 2022 年大会案内(第 5 報)

本大会は、一般研究発表(口頭およびポスター)、シンポジウム、専門巡検を中心に、静岡県地震防災センターを会場として開催します。開催方法は、総会はハイブリッドで行い、一般研究発表、シンポジウムは対面で行います。懇親会は実施しません。なお、新型コロナウイルスの感染状況によって総会、一般研究発表、シンポジウムを完全オンラインに変更し、専門巡検を中止する場合があります。講演申し込み等につきましては、昨年と同様の申し込み手続きを進めます。

1. 開催場所：静岡県地震防災センター

〒420-0042 静岡市葵区駒形通 5 丁目 9 番 1 号

<https://www.pref.shizuoka.jp/bousai/e-quakes/info/index.html>

8 月 26 日(金) 一般研究発表(口頭及びポスター、対面)

27 日(土) 一般研究発表(口頭及びポスター、対面)、総会(ハイブリッド)

28 日(日) 午前：シンポジウム(対面)

午後：巡検(Aコース：ふじのくに地球環境史ミュージアムバックヤード見学、

Bコース：熱海市伊豆山地区土砂災害)

※新型コロナウイルスの感染拡大により、完全オンラインとなる場合

8 月 26 日(金) 一般研究発表(口頭及びポスター) オンライン

27 日(土) 一般研究発表(口頭及びポスター) 総会 オンライン

28 日(日) シンポジウム・オンライン 巡検なし

2. 各種締切日

- ・一般研究発表の申し込み・講演要旨原稿提出締め切り：7月8日（金）17時
- ・シンポジウムの講演要旨原稿提出締め切り：7月8日（金）17時
- ・専門巡検参加申し込み締め切り：8月9日（火）17時
- ・参加申し込み締め切り：8月19日（金）17時
- ・プログラム公開：7月29日（金）（予定）
- ・ポスターのファイルデータの提出：オンライン開催に変更になった場合のみ、8月19日（金）17時。対面実施の場合は、ファイルデータ提出は不要です。
- ・Bコースの巡検は現地の状況を踏まえ、参加者数を10人で、先着順とします。

3. 申し込み方法

大会専用サイト <https://sites.google.com/view/2022jaqua/> から申し込んでください。

参加のキャンセルについては、下記のメールアドレスに参加日の前日までに連絡してください。件名は「大会キャンセル」とし、氏名、発表の有無、参加巡検の有無を明記してください。

メール：jaqua2022_meeting(at)googlegroups.com ((at)を@に変える)

4. 大会参加費

◎大会参加費：1000円。会場受付でお支払いください。ただし、70歳以上の会員、学部学生は無料です。講演要旨集：今回は冊子を作成せずPDFによる配布とする予定で、参加者は無料でダウンロードできます。

5. 各種申し込みと講演要旨原稿の送付方法

一般研究発表の申し込み（締め切りました）

(1) 発表者の資格と発表件数の制限

一般研究発表には、口頭発表とポスター発表があります。筆頭発表者（資格は会員であること）としては、口頭発表およびポスター発表について、それぞれ1人1件の発表申し込みが可能です。

(2) 発表形式と発表時間

発表形式は、口頭発表（オーラルセッション）およびポスター発表（ポスターセッション）がありますので、発表申込用紙で希望する方を選択してください。発表件数によっては、必ずしも希望の形式にならない場合もありますので、あらかじめご了承ください。口頭発表（オーラルセッション）の時間は1件15分程度（質疑応答時間含む）を予定しています（発表件数によって変更の可能性があります）。

(3) 参加・発表申込と講演要旨の提出方法

- ・大会参加には事前申し込みが必要です。また、発表を行うには講演要旨の提出が必要です。
- ・参加・発表の申し込みは、大会専用サイト（<https://sites.google.com/view/2022jaqua/>）から行います。
- ・日本第四紀学会会員以外の方の投稿は、今回行うシンポジウムに限ります。
- ・非会員の方で筆頭著者として一般発表を希望される場合は、至急入会手続きをお願いします。日本第四紀学会への入会手続きは、学会ウェブサイト「入会・会費の支払いについてのご案内」をご覧ください。
- ・講演要旨のテンプレートは6月下旬から大会専用サイトよりダウンロードできます。
- ・講演要旨集は大会前に大会専用サイトからダウンロードできるようにします。
- ・講演要旨の原稿はA4で1ページ（図表掲載可）です。「講演要旨原稿の書き方及びテンプレート」にある書き方にそって作成してください。講演要旨作成の際、テンプレートのフォントや行数などの設定は変更しないようにしてください。
- ・本学会員のうち2022年8月1日現在で39歳以下の方は若手発表賞に、学生・大学院生の方は学生発表賞にエントリーできます（両方へのエントリーはできません。また、筆頭著者でない場合はエントリーができません）。エントリー希望の方は、申込フォームの該当箇所に記入してください。積極的なエントリーを期待しています。

(4) 参加・発表申込と講演要旨の提出の締め切り

- ・一般研究発表の申し込み・講演要旨原稿提出締め切りは7月8日（金）17時です。
- ・参加申し込みは、2022年8月19日（金）17時まで受け付けています。

6. 総会委任状について

8月27日(土)午後開催する総会の委任状も大会専用サイトから提出できます。総会欠席予定の皆様には、総会委任状の提出をお願いします。

7. 開催日程

8月26日(金) 一般研究発表(口頭及びポスター)

受付	9:00～	
一般講演	9:15～11:45	ないふるホール
ポスターショートトーク	11:45～12:10	ないふるホール
ポスターコアタイム	13:00～14:30	多目的スペース
一般講演	14:30～16:45	ないふるホール

8月27日(土) 一般研究発表(口頭及びポスター) 総会

受付	9:00～	
一般講演	9:15～11:45	ないふるホール
ポスターショートトーク	11:45～12:10	ないふるホール
ポスターコアタイム	13:00～14:30	多目的スペース
一般講演	14:30～15:30	ないふるホール
総会	15:30～16:45	ないふるホール

8月28日(日) シンポジウム(一般市民を対象)

受付	9:00～	
シンポジウム	9:15～12:45	ないふるホール

休憩・昼食室：大研修室、学会本部：小研修室

昼食の弁当販売は致しません。また、感染症対策のため、茶菓子・飲み物は用意しません。

8. シンポジウム「伊豆衝突帯とその隣接地域における大規模自然災害」

趣旨：伊豆弧は、フィリピン海プレートの北進に伴い、約200～100万年前に本州へ衝突し、伊豆衝突帯が形成された。衝突は現在も続いているので、伊豆半島やその周辺には北伊豆断層帯や富士川河口断層帯などの多くの活断層があり、地殻の変形で急峻な山岳地域が形成されている。そのため、伊豆衝突帯では内陸型地震、土砂災害が頻繁に起きている。また、伊豆弧は火山弧であるため、伊豆東部火山群、富士山、箱根火山による火山災害も起きており、1989年には伊東沖で噴火が起き、手石海丘を形成した。一方、南海トラフ・駿河トラフでは約100～150年間隔で、相模トラフでは約200～400年間隔で海溝型巨大地震が発生し、その度に大津波が南海トラフ・伊豆弧・相模トラフの沿岸域に被害をもたらした。そのため、1978年には東海地震の予知情報を基にした大規模地震対策特別措置法が制定されている。一方、2011年に起きた東北地方太平洋沖地震とそれに伴う巨大津波による激甚災害が発生し、それを教訓に、国は2012年に南海トラフで起こる海溝型地震の想定を見直し、あらゆる可能性を考慮した最大クラスのマグニチュード9程度の南海トラフ巨大地震・津波(レベル2地震・津波)の被害予測を公表した。この予測は、南海トラフ沿いの沿岸地域の社会に多大な影響を与えている。さらに、2021年に熱海市で盛土の崩落に係した土砂災害が発生し、新たな社会問題となっている。このように伊豆衝突帯とその隣接地域は、地殻変動・火山活動が活発であり、それらの研究が2011年の東北地方太平洋沖地震以降に盛んに行われている。そこで、静岡大会では、伊豆衝突帯とその隣接地域における地震、火山活動、地殻変動、土砂災害に関する最新研究成果を学会内外の専門家から提供いただき、活動縁辺域の大規模自然災害についての理解を深めたい。

プログラム

- 9:00- 9:10 趣旨説明 北村晃寿
9:10- 9:50 宇宙測地学と伊豆・富士山周辺の地殻変動 三井雄太
9:50-10:30 火山噴火におけるマグマのダイナミクスと富士山・伊豆東部火山群 石橋秀巳
10:30-10:45 休憩
10:45-11:30 南海トラフ東部の古津波・古地震について 藤原 治
11:30-12:15 土石流の発生メカニズムについて 今泉文寿
12:15-12:30 質疑応答

9. 巡検

A コース：ふじのくに地球環境史ミュージアム

- 担当者 西岡・中西 ミュージアム玄関口に14時30分に集合 現地解散
アクセス：詳細は当館HP参照 (www.fujimu100.jp)
<オススメ>直通バス 約30分 片道370円
JR 静岡駅北口 バスターミナル8乗場 「美和大谷線ミュージアム行き」
(ミュージアム行き) 10時03分から16時33分(1時間1本)
(静岡駅行き) 10時52分から17時36分(1時間1本)

B コース：熱海市伊豆山地区土砂災害

- 担当者 北村 熱海駅改札口を出た所に15時10分に集合 18時00分に熱海駅前解散 少雨決行。巡検は徒歩で移動します。本巡検は現地の状況を踏まえ、参加者数を10人で、先着順とします。
連絡先 北村 kitamura.akiyoshi@shizuoka.ac.jp ((at)を@に変える)

10. 大会実行委員会および行事委員会

大会実行委員長：北村晃寿(静岡大)

実行委員：中西利典、西岡佑一郎(以上、ふじのくに地球環境史ミュージアム)

行事委員会：工藤雄一郎(委員長、学習院女子大)、池原 実(高知大)、奥野 充(大阪公立大)、箱崎真隆(歴博)、目代邦康(東北学院大)

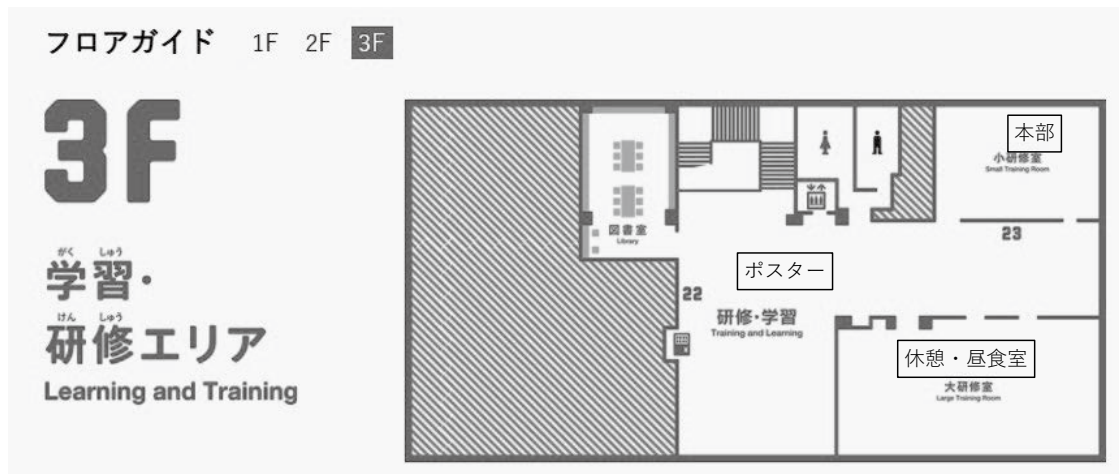
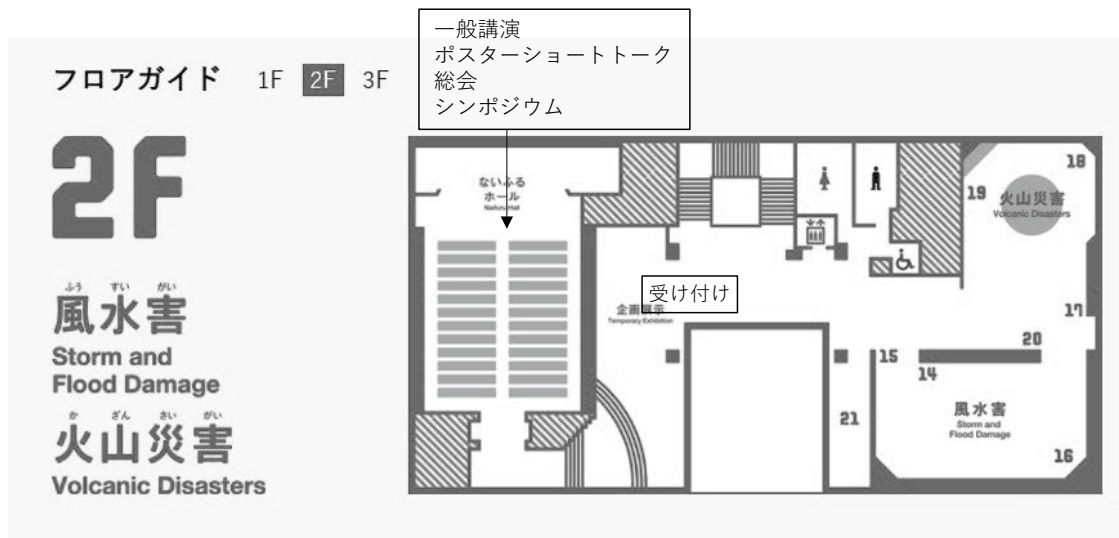
連絡先：2022年大会実行委員会事務局

〒422-8529 静岡市駿河区大谷836 静岡大学大学院理学研究科 北村晃寿

TEL：054-238-4798、メール：jaqua2022_meeting@googlegroups.com ((at)を@に変える)

会場案内

(次頁参照)



◆ 2022 年日本第四紀学会学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告

(1) 選考経過

日本第四紀学会 2022 年学会賞等の候補者の推薦は 2022 年 2 月 28 日をもって締め切られた。学会賞選考委員会（鈴木毅彦委員長、藤原 治副委員長、遠藤邦彦委員、齋藤文紀委員、高原 光委員）は、2022 年 3 月 19 日、4 月 9 日、5 月 16 日にオンライン会議を開催し、推薦があった候補者について 2022 年日本第四紀学会学会賞、同学術賞、同若手学術賞の選考を行った。選考委員会会議においては、推薦のあった候補者について候補者の資格の確認後、日本第四紀学会顕彰規程と関連する内規に基づき、推薦書、各候補者の業績などを参照して審議を行った。また委員の利益相反の確認を行い、該当した 2 名の委員については該当する候補者の審議から同委員らを除いて審議を行った。以上の結果、学会賞 2 名、学術賞 2 名と若手学術賞 2 名の受賞候補者を決定した。2022 年 6 月 18 日にオンラインにて行われた 2021 年度第 3 回評議員会において、これらの候補者が受賞者として決定された。なお、評議員会での決定後、学会賞受賞者 1 名については、ご本人が受賞を辞退された。

(2) 受賞者

●日本第四紀学会学会賞

受賞者名：池原 研会員（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

受賞件名：海底堆積物を用いた日本周辺海域の海洋環境変化とイベント堆積物の堆積作用と履歴の解明に関する研究

受賞理由：

池原 研会員は、主に日本周辺海域の海底堆積物の詳細な検討に基づき、堆積作用や海洋環境変遷、洪水や地震履歴の解明に関する海洋調査研究を、特に 40 年間で 100 回以上、2000 日以上調査航海に参加することにより進めてきた。各航海で採取された海底堆積物試料の詳細な観察と堆積学的な分析、並びに海底写真や海底地形、表層地層探査記録の解析から堆積作用の基礎的分析を行い、これらの知見を古気候・古海洋、災害科学などの解析に応用した。特に日本海北部のコア中の漂流岩屑の層位分布から、東アジア冬季モンスーン変動の復元を行った。またテフラ研究者と共同で、コアに挟在するテフラの詳細な検討を進め、コア間対比や年代指標に使用のみならず、陸域と海域でのテフラの年代を比較することで過去の海洋レザバーを復元した。2004 年のスマトラ島沖地震以降は、海底堆積物中の地震性堆積物を用いた地震履歴解読の研究を推進した。そして、陸上低地の津波堆積物記録に対応するタービダイトなどのイベント堆積物を報告するとともに、海溝陸側斜面の堆積物記録から地震サイクルや巨大地震や津波による堆積過程に関する新しい知見を見出した。これらの研究は、池原会員が共同主席研究者を務めた国際深海科学掘削計画（IODP）第 386 次航海に引き継がれ、活動は現在も継続しており、今後の研究の発展が期待される。以上の研究は、第四紀学の複数の領域を横断し、今後の第四紀学の発展に新しい方向を提示するものである。

日本第四紀学会においては 2003 年から評議員（8 期）・幹事・領域代表を歴任し、学会の活動を支えてきた。IODP のパネル委員や海上保安庁、大学等の委員会の委員長・委員も多数務め、第四紀学の発展に貢献してきた。さらに、日本地球掘削科学コンソーシアムのコアスクールの講師を長年務め、後進の育成にも積極的に取り組んできた。

池原会員のこのような研究成果や、国内コミュニティーを通しての第四紀学への貢献、また日本第四紀学会への多大な貢献は、日本第四紀学会学会賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会学術賞

受賞者名：須貝俊彦会員（東京大学）

受賞件名：湿潤変動帯における山地・平野・河川の地形発達に関する一連の研究

受賞理由：

須貝俊彦会員は、湿潤変動帯である日本列島において、地形学、堆積学、火山灰編年学などに基づく各

種手法を駆使し、発達史的な観点から山地、平野における地形および第四紀堆積物の形成過程を復元し、第四紀学の発展に貢献する研究成果を挙げてきた。隆起・沈降速度が速く活発な地殻変動が進行し、かつ顕著な降水を伴う地域を対象としたことにより、地形変化の速度が世界平均を上まわる地域における地形形成モデルを提示した。

山地研究では地形学における古典的課題である侵食小起伏面を赤石山脈での事例から取り上げ、マスマーブメントなどの観点からその形成過程について論じた。また山地から平野にかけて流下する河川上流部に発達する河成段丘の研究では、利根川水系碓氷川流域を対象として、火山灰編年学的手法により形成年代を決定した上で、掃流力や下刻速度の時系列的な復元を行い、侵食・堆積と気候変動との関係を論じた。

研究対象は平野にもおよび、濃尾平野でボーリングコアを堆積学的に解析し、河川最下流部における地形形成過程を明らかにした。これにより、土砂運搬システムとしての河川の縦断面形を、先にあげた研究も含めて最上流部から最下流部まで俯瞰したことになり、掃流力の時間的変化を氷期-間氷期サイクルとそれに応答する河川システムとして流域全体で考察した。また濃尾平野での研究では、単に河川地形研究に留まらず、デルタフロント堆積物の解析から地震性沈降を認め、それを養老断層の活動履歴の解明に結びつけるという変動地形学なテーマにも取り組んだ。また同平野に伏在する中期更新世堆積物の編年も試み、長期にわたる平野形成史をはじめ、三河高原の形成過程にも言及した。

このように須貝俊彦会員は、山地から平野、河川上流部から最下流部を守備範囲とし、10万年オーダーから数千年オーダーのタイムスパンで各種現象を取り上げ、時空間の制約を超えて発達史研究を進めてきたと言える。またその活動の場も公的研究機関から大学と多岐であり、50万分の1活構造図などの地質図作成という根幹的な基礎研究から、津波や土石流、地すべりなどの研究を通じて研究者育成まで手広く取り組んだ。自身の研究のみならず、このように広い観点から第四紀学の発展に大きく貢献した。

須貝会員のこれら一連の研究業績と活動は、第四紀学と本学会の発展に多大な貢献をしており、日本第四紀学会学術賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会学術賞

受賞者名：澤井祐紀会員（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

受賞件名：珪藻分析にもとづく環境復元と海溝型地震に関する一連の研究

受賞理由：

澤井祐紀会員は、海岸低地の地層に含まれる珪藻化石の分析から復元される相対的海水準変動を鍵として、北海道をはじめ太平洋やインド洋沿岸で完新世に発生した海溝型地震の研究を中心に多くの業績を挙げてきた。澤井会員は、2000年代初めには現生種の空間分布と統計手法を通して化石珪藻群集から古環境を復元するトランスファーファンクション（TF）法解析を高度化し、海岸の相対海面変動を10 cm オーダーで復元することに成功した。これを北海道東部の海岸に適用することで、千島海溝で17世紀に生じた巨大地震に伴って数十年かけて起こった余効変動を検出した。この成果は、海溝型巨大地震の発生メカニズムの解明や長期的な予測につながるものである。

その後は研究地域を北関東および東北日本の太平洋岸にまで広げ、先史・歴史時代の海溝型地震の復元に取り組んだ。中でも、西暦869年貞観地震による津波の実態解明は、社会的にも大きなインパクトを与えた。この研究は、津波堆積物の研究が過去の津波と地震の規模の復元に決定的に重要であることを実証することとなり、その後の古津波研究への社会的な理解と、古津波研究の発展につながった。さらに候補者の研究は、東北地方の沿岸低地を網羅した古津波イベントの編年へと展開した。また最近では、澤井会員は国際共同研究を主導して九十九里平野で見いだした古津波堆積物の解析から、フィリピン海プレートと太平洋プレートとの境界が津波発生源となる可能性を新たに提唱し、この研究も社会的な注目を集めている。

さらに澤井会員はチリ、北米西岸、インド洋沿岸といった地球上の主要な活動的縁辺でも古津波イベントや地震性地殻変動の研究に参加し、珪藻分析と環境復元のスキルを活かして、未解明であった巨大地震・津波の規模や繰り返しを明らかにする成果を挙げてきた。これらの成果は主要な国際誌に掲載されるだけでなく、第四紀研究をはじめ国内誌でもわかりやすい論説としてまとめられている。

澤井会員のこれら一連の成果は、第四紀学の発展に大きく貢献するものであり、日本第四紀学会学術賞

にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会若手学術賞

受賞者名：篠崎鉄哉会員（産業技術総合研究所地質調査総合センター）

対象論文1：Shinozaki, T. (2021) Geochemical approaches in tsunami research: current knowledge and challenges. *Geoscience Letters*, vol. 8: 6, <https://doi.org/10.1186/s40562-021-00177-9>

対象論文2：Shinozaki, T., Yamaguchi, N., Sekiguchi, T. (2020) Flume experiments test grain-size distribution of onshore tsunami deposits. *Sedimentary Geology*, vol. 407, 105750, <https://doi.org/10.1016/j.sedgeo.2020.105750>.

対象論文3：Shinozaki, T., Sawai, Y., Ito, K., Hara, J., Matsumoto, D., Tanigawa, K., Pilarczyk, J.E.(2020) Recent and historical tsunami deposits from Lake Tokotan, eastern Hokkaido, Japan, inferred from nondestructive, grain size, and radioactive cesium analyses. *Natural Hazards*, vol.103, 713-730, <https://doi.org/10.1007/s11069-020-04007-7>.

受賞理由：

篠崎鉄哉会員は、地層中における津波堆積物の識別およびその形成過程に関する研究を進めている。今回の推薦対象である3本の論文は、これまで取り組んできた地球化学的手法などを駆使した津波堆積物の識別に関する成果をまとめたものである。津波堆積物は条件によっては地層中で視認することが難しい場合があるが、これを検出することは正確な津波の浸水範囲や発生時期を知るために重要である。過去の海水の浸入の痕跡の検出には地層の化学分析が以前から研究されてきたが、新たな手法として海洋生物起源の有機物（バイオマーカー）を検出する試みが進んできた。篠崎会員はバイオマーカーにいち早く注目し、その有効性に関して議論を行ってきた。

対象論文1は、地球化学的な指標から過去に起きた海水の浸水を検出する手法について、自身の研究成果を含めて最近の世界の研究動向と展望をまとめたものである。この中では、化学指標によって単にイベント堆積物を検出するだけでなく、過去の海水の浸水範囲を復元することができる可能性を指摘している。

対象論文2は、津波堆積物の形成過程を復元するために水路実験を行った結果である。この論文では、野外で見られる津波堆積物と類似した水平方向の粒度変化が復元されており、実験時に撮影したビデオ合成画像は、実際には観察困難な津波堆積物の運搬過程について大きな知見を与えた。こうした情報を考慮することで野外調査や化学指標による津波堆積物の検出の信頼性が高まると期待される。

対象論文3では、北海道の沿岸湖沼において掘削した堆積物コアに非破壊検査を導入することで、目視では分からなかった薄く細粒な津波堆積物を識別し、過去約100年の歴史記録にある津波と対比を行っている。こうした解析手法を篠崎会員が進めてきた化学指標の研究と組み合わせることによって、さらなる信頼性の高い津波堆積物の認定が進んでいくと期待される。

これらの篠崎会員の業績は第四紀学の発展に貢献するものであり、若手学術賞にふさわしいと判断した。

●日本第四紀学会若手学術賞

受賞者名：石輪健樹会員（国立極地研究所）

対象論文1：Ishiwa, T., Yokoyama, Y., Obrochta, S., Uehara, K., Okuno, J, Ikehara, M., Miyairi, Y. (2021) Temporal variation in radiocarbon pathways caused by sea-level and tidal changes in the Bonaparte Gulf, northwestern Australia. *Quaternary Science Reviews*, vol. 266, 107079. <https://doi.org/10.1016/j.quascirev.2021.107079>

対象論文2：Ishiwa, T., Okuno, J., Sukanuma, Y. (2021) Excess ice loads in the Indian Ocean sector of East Antarctica during the last glacial period. *Geology*, vol. 49, 1182-1186. <https://doi.org/10.1130/G48830.1>

受賞理由：

石輪健樹会員は、最終氷期から現在に至る南極氷床と海水準変動に関する研究に取り組んでいる。今回の対象論文である2本の論文は、候補者がこれまで取り組んできた最終氷期最盛期における海水準変動に関する研究をさらに発展させた研究である。石輪会員は、これまでの研究においてオーストラリア北部に

おける海洋堆積物試料を用いて最終氷期最低位海水準の規模と時期に関する世界で最も高分解能の研究成果を報告してきた。今回の2本の論文は、対象論文1では海洋堆積物の解析において不可欠である放射性炭素年代データに関して、用いる試料の種類によって海洋堆積環境の影響を大きく受けていることを示し、対象論文2では最終氷期のMIS-3の東南極氷床の発達史に関して新しいモデルを提示したものである。

対象論文1は、北西オーストラリアの大陸棚から採取した海洋堆積物コア試料について、最終氷期以降の環境変化を物理モデルと海水準変動を統合して解析している。陸源植物、海棲の貝、有孔虫、不溶性有機物（acid insoluble carbon: AIC）などの起源の異なる試料の年代測定結果を堆積物の地球化学的な分析結果と併せて総合的に解析し、潮汐による混合が卓越した海域では再堆積の影響が大きいことや、陸源と海洋起源のAIC識別が重要であることを示した。

対象論文2は、MIS-3における東南極氷床に関してこれまで出版されてきたデータを再検討し、固体地球の変形モデル計算により氷床の発達史に関して新しいモデルを提示した。その結果、MIS-3において東南極氷床は大きく成長していること、最終氷期最盛期以前に南極氷床は最大化した可能性を示したもので、東南極氷床の拡大と融解のタイミングは北半球と大きく異なることを示した。

これらの論文は第四紀学の発展に貢献する優れた学術成果と認められることから、石輪会員を若手学術賞にふさわしいと判断した。

◆ 2022年日本第四紀学会論文賞受賞者・受賞論文選考報告

(1) 選考経過

日本第四紀学会論文賞ならびに日本第四紀学会奨励賞について、第四紀通信28巻6号、29巻1号、及び学会メーリングリストで会員からの推薦が募集され、2022年2月28日に締め切られた。その結果、1件の論文賞候補論文の推薦があった。論文賞選考委員会（兵頭政幸委員長、三田村宗樹委員、宍倉正展委員、中塚 武委員、オブラクタ スティーブン フィリップ委員）は、3月上旬に電子メールによる第1回論文賞選考会議を開催し、受賞の対象となる第四紀研究59巻1号から60巻4号に公表された論文を精査して、奨励賞候補の審査対象論文はないことを確認した。そして、一般会員から推薦された論文について各委員が審査を開始し、加えて前年度奨励賞受賞論文1編、学会賞・学術賞受賞者による招待論文4編を除く論文の中から委員による追加推薦を募り、3月31日に締め切った。4月上旬に開催した第2回論文賞選考会議において、複数の委員から推薦を受けた2編の論文を追加審査することが決まった。合計3編の推薦論文について全委員の審査評価結果を基に、5月上旬に第3回論文賞選考会議を開催した。その結果、下記論文を論文賞候補として委員会から推薦することを決定した。なお、これらの会議はすべて電子メールを使って行われた。2022年6月18日にオンラインにて行われた2021年度第3回評議員会において、これらの候補論文・会員である著者が論文賞受賞論文・受賞者として決定された。

(2) 受賞者・受賞論文

●日本第四紀学会論文賞

受賞者：白井正明会員、宇津川喬子会員

受賞論文：論説 白井正明・宇津川喬子・渡辺万葉（2020）赤水の滝の形成過程から考える大規模土石流が安倍川上流域の地形に与えた影響。第四紀研究 59巻1号，17-29頁。

受賞理由：

土石流は自然の地形と地質の形成に大きく関わり、災害をもたらすこともある。著者らは、近年南海トラフ地震との関連で注目されている安倍川上流域“赤水の滝”付近の土石流堆積物と基盤岩の地質調査、及び5mメッシュ標高データを用いた地形断面図作成に基づき、1707年の宝永地震に伴う大谷崩（日本

三大崩れに数えられる山体崩壊)により発生した土石流の堆積物と地形を詳細に調べた。その結果、安倍川沿いの土石流堆積物の埋積と地形形成の過程、及びその過程で赤水の滝がいつどのように形成されたのかを解明した。これまで、大谷崩による土石流は赤水の滝付近で止まり、その下流域の崩壊堆積物の約3割の体積を占める堆積物はその後の複数の洪水イベントによる二次的なものであると解釈されてきた。しかし、本研究では赤水の滝の500m下流に大規模土石流が遷移したハイパーコンセントレイテッド流堆積物を見つけ、さらに埋積前の推定地形断面と土石流面の比較から、土石流は赤水の滝から少なくとも孫佐島付近(谷軸沿いに約2km下流)まで一気に達したことを明らかにした。本研究成果は同地域の地形と地質の理解を劇的に発展させただけでなく、他分野への波及効果も予想される。例えば、発見されたハイパーコンセントレイテッド流堆積物は巨大地震が誘発した大規模土石流に伴う事例として今後堆積学的研究が期待される。近い将来起こる南海トラフ地震はトラフ全域にわたってプレート間の断層破壊が起こる“宝永型”との予想もある。大谷崩による土石流が従来の見解より2km以上も下流へ伸びたことで、災害教訓の継承に関する調査報告書(内閣府)などは大幅な見直しとなる。さらに、同地域の地震に伴う土砂災害の研究や河川防災対策などにも影響を及ぼす。

以上の諸点から、本論文は第四紀学の発展に大きく寄与すると期待され、本学会の論文賞にふさわしいと判断した。

◆ 2022 年日本第四紀学会名誉会員候補者選考報告

(1) 選考経過

名誉会員候補者選考委員会(百原 新委員長、岡崎浩子会員、小荒井 衛委員、小岩直人委員、米田 穰委員)は、日本第四紀学会会則および名誉会員候補者選考規程に基づき、名誉会員候補者の選考について慎重に審議した。委員の互選による委員長の選出、各委員からの候補者・推薦理由の提案、委員会としての推薦・報告書のとりまとめのすべてを電子メールによって行った。選考にあたっては、事務局が準備した学会役員等の経歴をまとめた資料から、選考報告時点で満年齢70歳以上、会員歴20年以上、評議員経験9期以上で幹事経験のあることを目安として候補者を抽出した。さらにその他の委員就任回数や学会賞・学術賞の受賞歴など学会への貢献、および日本学術会議等、第四紀研究の普及や振興に関わる委員や委員長の歴任、さらに研究業績や学会・社会への貢献等も考慮して、委員全員の賛成が得られた3名を推薦することとした。2022年6月18日にオンラインにて行われた2021年度第3回評議員会において、これら3名の候補者を最終候補者とするのが決定された。2022年8月に行われる総会において、審議され、名誉会員が決定される。

(2) 名誉会員候補者名および推薦理由

中村俊夫会員

中村俊夫会員(1950年生)は、名古屋大学年代測定総合研究センター(現、宇宙地球環境研究所年代測定研究部)において、我が国で最初の加速器質量分析法をもちいた放射性炭素年代測定施設を立ち上げ、40年にわたって日本における放射性炭素年代測定を先導してこられました。放射性炭素年代測定は、加速器質量分析による微量測定の実現によって、古環境、古気候、人類、地形、地震・津波、火山、災害・防災等の自然科学のみならず、考古・歴史といった人文科学にまで及ぶきわめて広範囲の諸分野において基幹となる年代測定法となりました。なかでも、日本の縄文土器が更新世最寒冷期にまでさかのぼることを示した研究(Nakamura et al. 2001 Radiocarbon)は、自然科学がとりあつかう第四紀の気候変動と人文科学がとりあつかう文化変容の関係についての再考を促し、世界的な業績として高く評価されました。その活動は、140編を超える学術論文や、『考古学のための年代測定学』(共著、1999年、古今書院)、『日

本先史時代の¹⁴C年代』（編著、2000年、日本第四紀学会）、『環境考古学マニュアル』（共著、2003年、同成社）等の数多くの普及書への寄稿にも及びます。これらの研究活動は、我が国における高精度年代測定確立と普及に多大な貢献をなし、特に人文科学分野に年代という基礎的尺度をもたらすことによって、第四紀学の基盤をより発展させたと評価され、2012年に「放射性炭素年代測定の高度化と普及への顕著な貢献」により本学会学会賞を受賞されました。中村俊夫会員は、日本第四紀学会の評議員を計10期20年にわたり務め、この間2期4年間幹事を担当され、2015年のINQUA名古屋大会組織委員会 会場委員長や高精度年代測定研究委員会委員長等を歴任されました。以上のように中村俊夫会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本学会の名誉会員として推薦いたします。

松浦秀治会員

松浦秀治会員（1952年生）は、第四紀の人類の移動・拡散を含む人類進化を解明するための基盤となる、インドネシア・ジャワや日本の人類遺跡の年代学的研究を精力的に推進してこられました。ジャワ原人化石産地として世界的に有名なサンギランなどの、中部～東部ジャワの人類化石産地で、1970年代から長年フィールド調査に携わってこられました。人類化石や地層の年代の把握が困難だったサンギラン地域のジャワ原人出土地点の地層で対比編年を進め、それまで混乱していた年代観を改めるといふ、アジアでの人類進化の研究に大きな足跡を残し、その成果をサイエンス誌の論文（2020年）などに公表されました。日本では「旧石器時代人骨」とされてきた試料の年代学的再検討を行い、日本本土の人骨試料のほとんどが旧石器時代人骨とは言えないことを明らかにし、教科書の記述に訂正をせまるなど各界に大きな影響を与えました。松浦秀治会員は、日本第四紀学会の評議員を1997年から2016年までの9期、副会長を1期、幹事を3期務められ、第四紀研究編集委員、50周年記念電子出版編集委員などの委員を務められたほか、2015年のINQUA名古屋大会では、組織委員会財務委員長を務めるなど、学会へも大きく貢献されました。2015年には、「インドネシア・ジャワと日本の人類遺跡に関する年代学的研究」により本学会学会賞を受賞されました。松浦秀治会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本学会の名誉会員として推薦いたします。

山崎晴雄会員

山崎晴雄会員（1951年生）は、これまで南関東のネオテクトニクスと活断層に関する研究を精力的に継続してこられました。活断層の存在が各地で指摘されてきた1970年代中頃以降には、詳細な編年に基づく詳細な地形面の認定、ボーリングによる変位量の把握、断層運動に伴う環境変化の復元など、第四紀学の研究手法や考え方を取り入れた研究を早くから実施されてこられました。さらに、伊豆半島が本州弧に衝突したことに着目し、その東西両側に位置する国府津－松田断層、富士川河口断層の特徴を明らかにするとともに、海溝に位置するプレート境界と陸域で観察される活断層との関係を深く考察し、南関東における地殻変動史と変動モデルを示すことに成功されました。これらの成果や、地形学、地質学さらには工学といった研究分野の枠を超え、活断層から発生する地震と防災について早くから取り組まれてきたことが高く評価され、2018年に「南関東を中心とした活断層の活動史にもとづくネオテクトニクスの研究」により本学会学会賞を受賞されております。最近では、『富士山はどうしてそこにあるのか』（単著、2019年、NHK出版新書）、『日本列島100万年史』（共著、2017年、講談社ブルーバックス）において、第四紀学の視点から解き明かされた日本列島の成り立ちを解説するなど、多くの第四紀学の知見を社会へ普及してこられました。山崎晴雄会員は日本第四紀学会の評議員を通算10期務められたほか、幹事会幹事、会計監査、第四紀研究編集委員、行事委員なども務められました。また、50周年記念事業実行委員会事務局、地震調査研究推進本部地震調査委員会委員を務めるなど長年にわたり本学会の運営と第四紀学の振興にも貢献されています。以上のように、山崎晴雄会員の第四紀学および日本第四紀学会に対する功績は誠に顕著であり、ここに本学会の名誉会員として推薦いたします。

◆ 2022 年日本第四紀学会功労賞受賞者選考報告

(1) 選考経過

名誉会員候補者選考委員会（百原 新委員長、岡崎浩子委員、小荒井 衛委員、小岩直人委員、米田 穰委員）は、功労賞候補者選考に関して、各委員からの候補者・推薦理由の提案、委員会としての推薦・報告書のとりまとめのすべてを電子メールによって行った。日本第四紀学会に関係した活動に貢献のあった者の選考基準については、従来 of 受賞事例を参考として、会員では選考時点で満年齢 70 歳、会員歴 20 年以上を条件とした。また、評議員や各種委員を長年務めて学会への貢献が顕著と認められることを事務局作成の資料で判断し、さらに、広報および編集書記としての貢献について事務局に確認した。そして、委員全員の賛成が得られた功労賞候補者 5 名（うち会員 3 名）を最終的に決定した。2022 年 6 月 18 日にオンラインにて行われた 2021 年度第 3 回評議員会において、これら 5 名の候補者を功労賞受賞者とする事が決定された。

(2) 受賞者

●日本第四紀学会功労賞

日本第四紀学会に関係した活動に貢献のあった者

・会員受賞者（五十音順）

池田安隆会員

公文富士夫会員

米澤正弘会員

受賞理由：

上記 3 名の会員は、日本第四紀学会の評議員や各種委員などを長年務め、学会活動への寄与と学術的な貢献が大きいことで、功労賞受賞者とする。

・非会員受賞者（五十音順）

奥村公弥子氏

原田仁美氏

受賞理由：

奥村氏は広報書記として第四紀学会ホームページの管理に 11 年間従事され、原田氏は編集書記として第四紀研究の編集に 10 年間従事されたことが、学会活動への貢献が大きいことで、功労賞受賞者とする。

◆第 21 回国際第四紀学連合 2023 ローマ大会の要旨投稿が始まっています

要旨投稿と早期登録の締め切りは 11 月 1 日です。

XXI INQUA Congress (Rome)

Rome: Italy

14 to 20 July 2023

<https://inquareoma2023.org>

Vrica の GSSP を含めて 19 のプレ巡検、8 つのポスト巡検、会議中間巡検が 7 つと多くの巡検が組まれています。来年にはコロナの制限も大きく緩和されるかと思えます。是非参加しましょう。

◆ 2021 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念第 2 回講演会報告

2022 年 6 月 4 日（土）に開催された 2021 年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念第 2 回講演会にて、2021 年学会賞受賞者である川幡穂高会員（東京大学／早稲田大学）と学術賞受賞者である岡田 誠会員（茨城大学）の 2 名の受賞記念講演が行われた。

川幡会員は「**極端気候が促す日本人と日本社会の進化—過去・現在・未来—**」というタイトルで講演された。本講演は、過去の気候・環境の変遷とともに我々（日本人）の祖先を系統的に研究し、現在、そして未来の予測までと多岐にわたるものであった。日本人の祖先がどのように日本列島に辿り着いて社会を築いたのか、祖先が生きた過去の気候・環境変動との関係を考古学や化学、遺伝学など幅広い分野で解説された。講演の中で提唱された「新寒冷気候説」は、大変興味深かった。その内容は、復元した過去の海水温（約 2 万年間）を時間とともにプロットし、過去の人間活動記録と照らし合わせると“大きな社会の変わり目は全て大寒冷期にある”というものである。日本人の祖先は、大寒冷期を経験し、そこから社会を進化・発展させたことに強い関心を抱いたとともに、我々の祖先が経験した厳しい時代を身近に感じることができた。

過去についてお話しされた後は、現代・未来についての解説も行われた。その内容は、現代の人為起源による温暖化問題のひとつである海洋酸性化についてである。現代の地球では、人間活動に

より温暖化ガスの排出量が増加したことで、自然が吸収する温暖化ガスも増加し、過酷な海洋酸性化が進行している。これについて有孔虫の研究から、海洋酸性化が進行することで、深海での炭酸塩溶解を促進させると述べられた。近年、日本ではカーボンニュートラルを目指す動きが広がっているが、川幡会員は脱炭素社会の成功と失敗を過去の環境記録と照らし合わせて述べられており、大変興味を湧いた。現代は前述した大寒冷期とは真逆の超温暖期であるが、我々は祖先のように極端な気候の中で社会を進化・発展させ、未来へと繋げていかないといけないと感じる講演であった。

本講演では、学会を牽引してきた川幡会員の研究とその成果を学ぶことができた。今回の内容は、2022 年に岩波書店から出版された“気候変動と「日本人」20 万年史”の一部とのことであり、本講演の内容が網羅された書籍も是非とも拝読したい。私も川幡会員のように、第四紀学会をはじめ、様々な形で研究成果を公表し、社会に貢献できるよう日々の研究活動に励んでいきたいと感じた。

（神戸大学大学院 酒井恵祐）

続いて、岡田 誠会員による「房総半島の海成鮮新—更新統における古地磁気—同位体複合層序の構築とその意義」というタイトルの講演について報告する。

当日はまだ梅雨入り前のさわやかな風の吹く土曜日、そうだ今日は第四紀学会の受賞講演だ、川幡先生と岡田先生、これは面白いお話が伺えそう、ランチビールでも飲みながらオンライン拝聴いたしましょう、とのんびりかまえていたら、いきなり直前にO先生より岡田先生の講演の報告を「第四紀通信」に書いてくれないかとのメッセージ。えー？そんな、素人が恐れ多いと思ったのだが、会員外にも一般公開している講演会だし、きっとチバニアン(GSSP)に至る経緯やご苦労話とかだろうから、まあ私でも務まるかしら、と安易にお引き受けしたら、チバニアンのお話じゃなかった。以下間違いがあったらお許してください。

1. 複合層序の意義

複合層序とは、磁気層序—生層序—海洋酸素同位体層序—テフラ層序—放射年代などの複数の層序学的研究を同じ地層で行い、それらの間の層序関係を決定するもの。まさに第四紀学ですね。

意義1) 地域層序をグローバル層序と対比可能にしてくれる。

意義2) グローバル層序のアップデートが図れる。

しかし地磁気逆転層位と海洋酸素同位体変動との関係を見るときに、lock-in depth問題が起こる。これは、堆積残留磁化の獲得が堆積面より下位で起こってしまう、つまり、実際の堆積年代と地磁気の獲得年代にズレが生じて、地磁気逆転を示す年代が実際に起こった時よりも古く検出されてしまう問題。堆積速度が遅いと、ときには1万年もずれることがある。lock-in depth問題を最小化するには、堆積速度が数十cm/kyr以上の堆積層の解析が必要となる。それには前弧海盆の陸源堆積物が有効であろう。

2. 複合層序構築に最適な地層としての上総層群・安房層群・千倉層群

陸化した第四紀の前弧海盆として、上総層群の

特徴は、1) 堆積速度が速いこと、2) 微化石を多産すること、3) 火山碎屑物があるので古地磁気シグナルも強い。このように酸素同位体比と古地磁気を両方測れて、しかも平均堆積速度は2m/kyrと非常に速い。千葉複合セクションを含む国本層は連続記録が得られ、堆積速度は最大4m/kyr、酸素同位体記録などから、1000年、100年スケールの環境変動まで読み解くことが可能である。しかも房総半島には上総層群だけでなく、千倉層群、安房層群と、過去4.5-0.5Maにわたる複合層序構築の可能性がある。

3. 千倉層群における第四紀開始層位

房総半島南部の千倉層群には第四系基底にあたる Gauss・松山境界付近の露頭があるが、その最も重要な層準の露頭がなくて欠けていた。しかし、ボーリングによりその層位を得ることができた。ジェラシアン GSSP (イタリアシシリイ島) と直接対比が可能で、しかも千倉層群のほうが古地磁気と海洋酸素同位体比の関係がよくわかるのである。

つまり、前弧海盆の陸源堆積物を用いた層位的な解析を進めることで、日本の地層をグローバル対比するだけでなく、日本で世界基準となる複合層序構築が可能となる。日本の地層が世界の層位学の発展に資する可能性が大いにある。

房総半島はチバニアンだけじゃなかった！第四紀の基底から全体にわたって正確な年代を入れた層序が千葉から発信できるというのはすごい話である。友人に「千葉時代って江戸時代よりずっと長いよ」とか冗談言って笑っていましたが、それどころではない。しかも、さまざまな複合的なアプローチで、まさに探偵が犯人を追いかけるように、ひとつひとつ絞り込まれてきた経緯がわかり、層位学、第四紀学の面白さを堪能させてくれたご講演でした。

(東京大学出版会 小松美加)

◆石田志朗先生のご逝去を悼む

5月19日夕方、石田志朗先生が、京都にて逝去されました。昭和5年(1930年)、石川県のお生まれで享年92歳でした。先生は昭和28年(1953年)に京都大学理学部を卒業され、同大学大学院に進み、京都大学理学博士の学位を授与されました。昭和34年(1959年)京都大学理学部助手に採用され、同大学理学部助教授を経て、平成元年(1989年)山口大学理学部教授に昇任され、平成6年(1994年)定年退官されました。退官後も、琵琶湖博物館や山陰ジオパークでの活動、重要な地質露頭や地形などの現状をまとめる調査等を行ってこられました。

石田先生は、新第三系の層序・地質学的研究、古植物学的研究を始めとして、大阪層群相当層を主とした第四系地質学的研究、考古学における地質学的研究で大きな業績を残されました。新第三系層序・地質学的研究では、北陸地域・能登半島における詳細な地質調査を軸に、古地理構造発達史の研究、古植物学的研究で大きな成果をあげ、京都大学理学博士の学位を授与されました。その後、大阪層群相当層の第四系地質学研究を1960年代から開始され、従来からの詳細な火山灰・内湾海成粘土層を鍵層とした層序学的研究のフィールドをひろげ、最新の年代測定手法や古地磁気層序学的手法を導入し、日本列島の第四系層序の詳細対比を試み、西南日本の古地理・地質構造発達史の研究に大きな進展をもたらされました。この間の成果の例として、第四紀研究8巻や9巻掲載の論文などが挙げられます。さらに、考古学への自然科学的手法の導入に積極的に取り組み、その成果は考古学における堆積学的・古環境学的・第四紀学的見地からの研究へのさきがけとなりました。このように考古学・地質学の学際融合型の研究を進展させ、他分野への地質学的手法の活用を具体的に提示してこられました。また、応用地質学や農林地質学の方面を含め、幅広い地質学の発展につくされ、各種の地質図幅や国土利用基本調査報告等をまとめられました。先生は、また、インドシワリクやケニアでの海外調査にも参加され、地質学的調査を実施されました。

先生は、日本第四紀学会評議員を歴任し、学会の運営と発展に多大な貢献をするとともに、多くの学生や研究者の育成に貢献されました。

以上のような永年にわたる教育研究上の業績や、国内外の活動を通して学術振興発展と社会的発展



1994年3月撮影

が顕著であるとして、日本地質学会名誉会員に推薦され、日本第四紀学会の功労賞を授与されました。

私の先生との思い出は、1973年、私が京都大学の3回生になり、地質学鉱物学教室で課題演習を選択した時から始まります。すでに50年近い歳月が流れました。3回生では、石田先生の地質調査法の演習が地質学を専門とするための重要な基礎となりました。この後、4回生の課題研究では石田先生の指導で、静岡県第四系である可睡丘陵の小笠層群を対象に実施しましたが、猛暑の中を歩いたことを覚えています。この研究は、その後、掛川地域での石田先生主宰の合宿調査の成果を含めて、第四紀研究19巻に公表できました。修士・博士課程では第四紀グループに属して、石田先生が主戦場にされていた大阪層群相当層の東海層群の研究を進めました。その手法は、まさに石田先生が確立された「最新の年代測定手法や古地磁気層序学的手法を導入し、日本列島の第四系層序の詳細対比を試み、西南日本の古地理・地質構造発達史の研究」でした。そのとき学んだ「4次元空間認識」は今でも重要な私の中のたからものになっています。また地盤工学分野や考古学分野との交流を含めて、第四紀学的研究手法を学ぶ重要な機会をいただきました。この間の先生とご一緒したたくさんのフィールドを手元の写真をみながら思い出しています。

私が1987年に別府の京都大学地球物理学研究施設(現地球熱学研究施設)に赴任して、しばら

くはご一緒する機会は少なくなり、学会でお会いする程度でしたが、1995年に京都に配置換えになり、また交流が増えました。特に、先生は文献収集等で地球惑星科学図書室においでになることも多く、貴重な時間をご一緒することができました。最近では、直接お会いする機会はほとんどなくなりましたが、先生は電子メールを使われており、時々メール連絡をいただきました。そのタイトルは「石田です」というもので、内容はどこか石田先生がお話されているような文体で、「石田です」メールというファイルを作成して、なつかしく思い出しています。最後のメールは2018年5月19日で、私の定年退職時にまとめた本をお贈りし、京大総合博物館で考古学関連での講演会をおきき

いただいたときにいただいたメールでした。文中に「小生、70代が最も元気で楽しい時代でした」という文言があり、弟子たちにまだがんばるんだぞという励ましをいただいた貴重な内容でした。この50年近く、温厚な笑顔に満ちた石田先生と研究等でご一緒いただいたことを本当に贅沢な時間だったと感じています。

自分の専門分野だけでなく、課題解決のために他分野との学際融合的な考え方や方向性が必要な時代にあって、この学際的第四紀学の先頭に立ってこられた先生のご逝去は学会にとって、非常に残念なことであります。心からご冥福を祈ります。

(京都大学名誉教授・竹村恵二)

◆日本第四紀学会 2021 年度第 3 回評議員会議事録

日 時：2022 年 6 月 18 日 (土) 9:00 ~ 12:00
 方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議
 出席者：鈴木毅彦 (会長)、北村晃寿 (副会長)、須貝俊彦 (副会長)、(以下、評議員) 久保純子 (議長)、加 三千宣、坂下 涉、田村 亨、平林頌子、吾妻 崇 (オンライン委員兼任)、石村大輔、奥野 充、丹羽雄一、藤原 治、堀 和明、青木かおり、兵頭政幸、水野清秀、井上 淳、江口誠一、中塚 武、百原 新、石原与四郎、三田村宗樹、目代邦康 (オンライン委員兼任) (計、24 名)
 委任状：14 通 (議長委任 13、江口誠一評議員委任 1)

水野清秀庶務委員長の司会で開会され、鈴木毅彦会長の挨拶があり、定足数の確認に続いて、久保純子議長のもと、議事が進行された。なお、目代邦康・吾妻 崇両オンライン委員によって Zoom システムの管理・操作が行われた。

(1) 審議事項 1 の 2022 年学会賞・学術賞・若手学術賞の受賞者選考については、鈴木毅彦学会賞選考委員長から、選考経過と候補者の推薦理由の説明があり、候補者や利益相反の関係にある評議員は一時退席またはブレイクアウトルームに移動してもらったうえで審議を行い、賛成多数で下記の

通り、全候補者が受賞者として決定された (詳細は本号の 2022 年学会賞・学術賞・若手学術賞受賞者選考報告参照)。

学会賞受賞者：増田富士雄会員、池原 研会員

学術賞受賞者：須貝俊彦会員、澤井祐紀会員

若手学術賞受賞者：篠崎鉄哉会員、石輪健樹会員

(2) 審議事項 2 の 2022 年論文賞の受賞者・受賞論文選考については、兵頭政幸論文賞選考委員長から選考経過と候補論文の推薦理由について説明があり、審議の結果、賛成多数で、下記の通り候補論文とその著者の会員が受賞論文・受賞者として決定された (詳細は本号の 2022 年論文賞受賞論文・受賞者選考報告参照)。

論文賞受賞者および受賞論文：

白井正明会員、宇津川喬子会員

論説 白井正明・宇津川喬子・渡辺万葉 (2020) 赤水の滝の形成過程から考える大規模土石流が安倍川上流域の地形に与えた影響、第四紀研究 59 巻 1 号、17-29 頁。

(3) 審議事項 3 の 2022 年名誉会員候補者及び功労賞受賞者の選考については、百原 新名誉会員候補者選考委員長から名誉会員及び功労賞候補者それぞれについて選考経過と候補者の推薦理由の説明があり、審議の結果、賛成多数にて下記の通り、名誉会員候補者については全員最終候補者とする

ことが決定され、功労賞候補者は全員受賞者として確定された（詳細は本号の2022年名誉会員候補者選考報告及び2022年功労賞受賞者選考報告参照）。

名誉会員候補者：中村俊夫会員、松浦秀治会員、山崎晴雄会員

功労賞受賞者：池田安隆会員、公文富士夫会員、米澤正弘会員、奥村公弥子氏（広報書記）、原田仁美氏（編集書記）

そのほか、いくつか意見交換として説明や議論が行われた。まず、4年間の会費滞納者について、名簿が示され、6月末で会費が納入されないと自動的に除籍となることが確認された。また、学会設立70周年事業の一つとして書籍出版が計画されていることや、静岡大会の予定が説明された。そのほか、役員選挙規定や会則の一部改訂案について議論が行われた。議事終了後、北村晃寿副会長の挨拶で評議員会は閉会となった。

◆日本第四紀学会 2021 年度第 5 回執行部会議事録

日 時：2022 年 6 月 14 日（火）16:00～19:10

方 法：Zoom システムを用いたオンライン会議

出席者：鈴木毅彦（会長）、北村晃寿（副会長）、須貝俊彦（副会長）、水野清秀（庶務）、齋藤めぐみ（会計）、工藤雄一郎（行事）、荻谷愛彦（編集）、山田和芳（渉外）、田村 亨（領域 1）、堀 和明（領域 2）、目代邦康（領域 5）

欠席者：那須浩郎（広報）、卜部厚志（領域 3）、海部陽介（領域 4）

オブザーバー出席：永峯菜穂子（事務局）

主な報告事項

- (1) 下記の協賛・共催・後援の手続きを行った。
協賛：日本学術会議「持続可能な発展のための国際基礎科学年」、共催：日本学術会議シンポジウム「チバニアン、学術的意義とその社会的重要性」（5月24日）、後援：第65回粘土科学討論会（9月7・8日）
- (2) 学会賞・学術賞・若手学術賞候補者選考答申（学会賞選考委員会）、論文賞候補者選考答申（論文賞選考委員会）、名誉会員・功労賞候補者選考答申（名誉会員候補者選考委員会）が提出された。
- (3) 業務委託費第2回請求分とその他の経費を支払った。
- (4) 編集書記のパソコンとプリンタ、広報書記のマウスを購入した。パソコンは学会の備品として管理することとした。
- (5) Zoomの年間契約を見直し、参加者500人までの大規模ミーティングに変更した。

(6) 「デジタルブック最新第四紀学」の残部（96冊）が完売した。

(7) 「第四紀研究」第61巻2号（講座1編、短報1編）を刊行した。受理済み論文について、組版が終了したものからJ-STAGEで早期公開（要認証）を行った。またJ-STAGE dataと学会ウェブサイトでも電子付録のフリー公開を行った（61巻2号掲載論文）。

(8) 2022年6月4日現在の手持ち原稿（書評を除く）は受理前9編、受理済6編である。これらとは別に、2016年千葉大会シンポジウム領域2特集号その2、2021年遠隔シンポジウム「陸域アーカイブから読む環境変遷と巨大災害：防災・減災に向けて」特集号、2021年大会シンポジウム「近畿における歴史時代の自然環境」特集号の投稿原稿受付を始めた。6月4日現在の特集号の投稿論文は合計13編である。

(9) 「第四紀通信」第29巻2号・3号を編集・刊行した。また、学会ホームページの更新とメーリングリストでの情報配信を行った。

(10) 2021年日本第四紀学会学会賞・学術賞受賞記念第2回講演会を2022年6月4日（土）10:00～12:00にオンライン講演会として実施した。当日の参加者は最大で80名程度であった。学会賞受賞講演 川幡穂高会員「極端気候が促す日本人と日本社会の進化—過去・現在・未来—」、学術賞受賞講演 岡田 誠会員「房総半島の海成鮮新一更新統における古地磁気—同位体複合層序の構築とその意義」。

(11) 2022年静岡大会は、一般研究発表（口頭、ポスター）、公開シンポジウムは対面で、総会はハ

イブリッドで行うこととした。講演要旨集は印刷せず PDF 版のみとした。

(12) 2022 年 5 月 9 日に防災学術連携体が主催する第 13 回防災学術連携シンポジウム「自然災害を取り巻く環境はどう変化してきたか」が開催された。学会を代表して鈴木克明会員が水月湖の年縞研究を紹介した。シンポジウムの参加者は 1,285 名であった。

(13) 2022 年 5 月 22 日から 6 月 3 日まで、日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2022 年大会がハイブリッド形式にて開催された。「第四紀：ヒトと環境系の時系列ダイナミクス」「活断層と古地震」セッションを単独および共同提案として主催した。またそのほか 4 つのセッションに共同提案した。

主な審議事項

(1) 700 部ほど残っている広報チラシ「第四紀とは」の取り扱いについて検討し、静岡大会にて必要な人に配布するほか、オープンキャンパスなどで使用することにした。また、チラシの改訂版を領域 5 メンバー中心に 1 年をめどに作成すること

にした。

(2) 役員選挙規程や会則の改訂案について議論し、評議員会で意見交換を行って次年度の評議員会・総会で提案するか検討することにした。

(3) 第 3 回評議員会の議題と役割分担について、確認を行った。

(4) 外部機関からの顕彰に関する学会及び個人の推薦依頼、アンケート依頼等に対して、誰が判断するかを基準を確認した。

(5) 年会費のオンライン決済について議論を行い、評議員会でも意見を聞くことにした。

(6) 2023 年大会の候補地について議論し、関東圏内で打診することにした。

(7) 書店から第四紀学会設立 70 周年 (2026 年) に関しての出版計画の打診があり、山田渉外委員長を中心に具体的な検討を始めることにした。

(8) JpGU 内の教育検討委員会の活動にあわせて、共催という形で講演やイベントなどの運営についての協力の打診があった。チバニアン採択の日などを記念日として関連領域の活動と位置付けられないか、検討を進めることにした。

★★★ 情報発信を希望される方へお願い ★★★

日頃から日本第四紀学会のコミュニティへ情報提供くださり、ありがとうございます。提供された情報の円滑な配信を目指して、広報委員会から皆様へ、以下のお願いを致します。

- (1) 情報発信の手段として、ML の積極的な使用をお願いします。
 - 1) メール本文に配信内容のタイトルと簡単な情報を書いて広報委員会アドレス (jaqua-koho(at)quaternary.jp) へご投稿ください。
メール本文の情報は常識的な長さでお願い致します。
 - 2) 広報委員会にて文言の微修正を行う、または投稿した方に情報の修正・追加をお願いすることがあります。
 - 3) イベント等の周知などで当該イベントの URL がある場合、その URL も載せてください (ただし上記の通り、メール本文にも簡単な情報も載せるよう、お願い致します)。
 - 4) 第四紀学にほとんど関連しないものについては配信をお断りすることがあります。
 - 5) 学会、研究集会のお知らせでも、第四紀学会の会員間で参加費等に不平等が生じるものは配信しませんので、ご了承ください。
 - 6) 添付ファイルは ML に配信致しません。
- (2) 第四紀通信への掲載依頼、日本第四紀学会 HP への掲載依頼も受け付けておりますが、基本的に、主催・後援イベントなど第四紀学会として会員に広く周知する必要があると認められる情報、「公募・助成」情報 (こちらは HP のみの掲載となります) 等に限られます。詳しくは広報委員会アドレス宛に、個別にご相談ください。
- (3) 第四紀通信の表紙用の写真 (または作成した画像) を受け付けています。詳細は第四紀通信 27 巻 6 号の巻末をご覧ください。
- (4) 第四紀通信は偶数月 1 日刊行予定としていますが、情報をなるべく早く皆様にお届けできるように、奇数月下旬に版下が完成した段階でホームページに掲載していますので、ご利用ください。

日本第四紀学会広報委員会：那須浩郎・オブラクタ スティーブン フィリップ・丹羽雄一・竹下欣宏・小森次郎
広報書記：岩本容子・奥村公弥子

日本第四紀学会ホームページ <http://quaternary.jp/> から第四紀通信バックナンバーの PDF を閲覧できます。

日本第四紀学会事務局

〒169-0072 東京都新宿区大久保 2 丁目 4 番地 12 号 新宿ラムダックスビル

株式会社春恒社 学会事業部内

E-mail : daiyonki(at)shunkosha.com 電話 : 03-5291-6231 FAX : 03-5291-2176